

昨年のお会いからそろそろ一年になります。この一年間、貴協会の恵みを受けて、自分の学業と生活は順調に進んできました。来月の7日に修士論文を提出し、再来月の4日に修論発表会を行うことになりました。また、退院してから三ヶ月、精神的にも肉体的にもすっかり回復しています。以下、この三ヶ月の自分の学業と生活の基本状況をご報告させていただきます。

学業面

前回と同じ状況で、福祉政策ゼミの「貧困経済学」というテキストを学びました。今学期は、全4回の発表を行い、以前と比べても一番大変な学期だったと思います。特に、修論を作成していた時など、常に学業に追われているという圧迫感がありましたが、そのため自分の学習能力や挑んでゆく力などはアップしました。去年の奨学金面接で、面接官の先生からいただいたアドバイスを強調したいと思います。先生のアドバイスにより、自分の研究である「高齢者の主観的厚生に関する要因分析」に、子どもに関わる要因を加え、実証分析を行ったため、よりいい結果が得られたのです。まず、「子どもの有無」は高齢者の主観的厚生（幸福度や生活満足度などの指標）に有意に働きます。言い換えると、子どものいる高齢者は子供のいない人よりも幸福水準が高いのです。また、「子どもと高齢者の居住形態」と「子どもが高齢者から受ける経済援助」の二つの要因を考慮すると、高齢者の親は子供の生活水準を保つ為に、遺産動機を持つと考えられるのです。指導教授はこれらの結果に対し、高く評価をしてくださいました。今回のレポートを契機として面接官の先生方に感謝申し上げます。自分は、もし将来博士課程に進学すれば、こういった課題を研究し続けていきたいと考えております。

生活面

この三ヶ月の生活状況をご報告させていただきます。修士時代の最後の学期でも、ボランティア活動の新入生サポートチームに参加し、四人の新入生をサポートしました。これは私の学生生活の中でも素晴らしい経験となりました。コロナ禍の影響で、去年から新卒就職も厳しくなっていますが、中国の企業と日系企業から一つずつ内定をもらいました。そこで家族とよく相談し、慎重に考えた結果、一先ず中国に戻ることにしました。

私にとって、もっとも残念なのは、奨学金ご担当者様をはじめ日中友好協会の方々と長い間会えなかったことです。この大変な一年間、貴協会のおかげで私の留學生活は無事に終えることが可能になりました。最後に、コロナ禍のために、各所でイベントの中止や学校の休校、マスクの欠品などが続いており、まだまだ私たちはその影響を強く受けております。この状況ができるだけ早く終息することを心より願い、皆様のご無事をお祈り申し上げます。